

報告

第51回粘土科学討論会（札幌大会）報告

第51回粘土科学討論会（札幌大会）は、9月12日（木）～14日（金）に北海道大学学術交流会館にて開催されました。北海道大学では、2000年に山岸皓彦会員が中心となり、第44回粘土科学討論会が開催されております。北海道大学が在ります札幌では、例年9月に数多くの学会が開催され、多数の方々を全国各地からお迎えいたしております。本年は、粘土科学討論会の周辺日程で、ジオフェスティバル（北海道立理科教育センター主体の行事）、北海道地すべり学会と北海道応用地質研究会共催の地すべり見学会、技術 e-フォーラム（全国地質調査業協会連合会主催）、地質情報展（産総研主催）、日本地質学会第114年学術大会（日本地質学会主催）等の地質関連の行事が連続して開催されたため、9月2日から討論会の見学会終了の14日までを“北海道 Geo-Week2007”とし、粘土科学討論会はそのフィナーレを飾る行事として開催されました。なお、討論会前日には日本粘土学会若手の会（代表：横山信吾会員）が北大で開催され、40名弱の参加者が活発な研究討論と毛ガニを堪能したように報告を受けております。

今回、参加人数は172名（内、外国籍の方が11名）で、内訳は会員130名、学生会員39名（内、新規に学生会員になられた方が13名）、非会員3名でした。今回登録された口頭発表は56件、ポスター発表は59件で、残念ながら口頭発表1件が発表者の健康上の理由からキャンセルされました。初日（12日）の午前は、2会場に分かれて口頭発表が開催され、活発な質疑応答がなされました。初日の受け付けに手間取り、多くの方々にご迷惑をおかけしました。この場をお借りしてお詫び申し上げます。お手伝いいただいた学生に口頭で役割を理解させるだけでなく、実際に受付の練習をさせればよかったと反省いたしました。

午後には特別講演とシンポジウムを開催いたしました。特別講演は、「コロイド凝集とそのモノリス型セラミック膜ろ過プロセスへの導入効果」というタイトルで、北海道大学21世紀 COE プログラム拠点リーダーを務められております渡辺義公教授にお願いしました。先生は、持続的な社会形成のために安心・安全な水資源の確保の重要性を主張され、効率的な水処理のためには懸濁する粘土粒子の取り扱いが重要であることを研究事例とともにご紹介されておりました。引き続き、粘土科学討論会シンポジウムが同じ会場で行われました。このシンポジウムのテーマは「粘土、層状化合物を用いた最先端材料研究」で、二次元平面や層空間など特異な“場”を提供する層状化合物を主題材とし、無機有機複合体の光や磁場との関わり、最先端の分析技術などの最新的话题を通じて、材料としての層状化合物のポテン

シャルについて活発な議論がなされました。講演者と演題は以下のとおりです。「材料研究の素材としての粘土の意義」／黒田一幸（早稲田大学理工学術院）、「走査プローブ顕微鏡による表面電荷の画像化」／松本卓也（大阪大学産業科学研究所）、「非磁性材料の磁気プロセッシング：粘土の磁場配向」／木村恒久（京都大学大学院農学研究科）、「粘土を利用した光スイッチング磁性薄膜材料」／栄長泰明（慶應義塾大学理工学部）、「無機ナノシートの積層制御による機能性開発」／佐々木高義（物質・材料研究機構）、「ナノ層状環境下の光化学」／井上晴夫（首都大学東京 大学院都市環境科学研究科）。なお、常務委員のご提案により、講演をいただいた先生方に感謝の気持ちを込めまして、下に示しますようなプレートの贈呈を行いました。私にとりまして、研究の最先端におられる先生方を一堂に会し、最先端の研究内容を一度に拝聴できたことはこの上ない喜びでありました。同様の意見を多くの方々からも頂戴しました。私自身、ご講演を拝聴してかなりエンカレッジされたことを昨日のここのように記憶しております。本シンポジウムを企画されました高木慎介会員をはじめ企画委員の方々感謝申し上げます。

シンポジウムの後、会場近くの札幌アスペンホテルにて懇親会が盛大にとり行なわれました。参加者は総勢約100名でした。本討論会の特徴の一つでもあります。半数以上の参加者が懇親会に参加されたこととなります。懇親会の冒頭にアトラクションとして、アイヌ民族博物館の皆様による歌と演奏・演技を行いました。このアトラクションは、遠く札幌までおいでいただいたことへの感謝の印として、半年以上前から内密に準備を進めてきたものであります。ご堪能いただけたでしょうか？その後には坂本尚史会長および北海道大学大学院工学研究科の三上隆研究科長のご挨拶、湊秀雄先生の乾杯と続きました。乾杯の後には和やかな雰囲気とともに歓談の時間がもたれ、「ムックリ」（アイヌ民族楽器）の実演販売（レッスン付）や、シンポジウム講演者を代表して井上晴夫先生のご挨拶、次回討論会の実行委員長である渡嘉敷義浩会員のご挨拶、そして米田（第51回粘土科学討論会実行委員長）が最期を締め、盛況のうちに終了いたしました。

翌13日は午前には口頭発表と総会、午後はポスターセッションと口頭発表がありました。総会では、冒頭、逝去会員への黙祷が捧げられ、次いで坂本会長のご挨拶、各種報告と審議と続きしました。そして、小暮敏博（学会賞）、古賀慎（功績賞）、安藤生大、石井亮（奨励賞）、井上厚行、八田珠郎、奥村輔、西戸裕嗣、蜷川清隆、坂本尚史（論文賞）、高田盛生氏、小倉栄樹氏（学術振興

基金賞) 各氏が表彰されました。

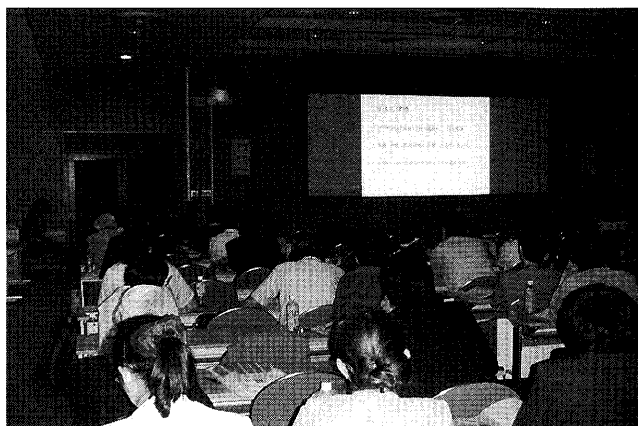
今回の講演申し込みでは、イモゴライトに関する研究報告が多数認められましたので、プログラム委員の方で午後の口頭発表の時間にイモゴライト関連の研究発表を集中させ、鈴木正哉会員に座長をお願いして総合的に議論する機会を設けました。本討論会は、粘土や粘土鉱物を研究対象としている広範囲の研究分野の方々が集まることが大きな特徴です。今後はより一層、研究対象や現象などを等しくする者が総合的に議論できる場を提供することが必要になるかもしれません。今回のプログラム委員によるイモゴライトの企画が、今後の議論のあり方を議論するネタとなれば幸いです。どうぞ、学会の常務委員にご意見をお聞かせ下さい。なお、発表時35歳までの者を対象とする優秀講演者賞には口頭発表の部16件、ポスター発表の部16件の応募があり、討論会終了後に岡田友彦会員(信州大)、黒田義之さん(早稲田大)(以上口頭発表の部)、赤坂寛子さん(神戸薬科大) 佐々木洋和さん(東工大)(以上ポスター発表の部)が選出されました。

討論会修了後、14日には見学会が行われました。札幌駅に集合した25名の参加者は、バスに乗って定山溪温泉を通り、近くにある豊羽鉱山を見学しました。坑道が地熱により高温になるため、現在は採掘を行っていませんでしたが、採掘当時の面影が分かる施設を中心に見学いたしました。ここでは、坑口周辺に鉱石を展示していたコンテナの周りに落ちていた鉱石を血眼になって捜している見学者が印象に残りました。その後洞爺湖や有珠山の火口見学をした後に、参加者を新千歳空港や札幌駅にお送りし解散となりました。

今回の粘土科学討論会は、札幌という参加に多額の交通費と時間のかかる場所での開催でした。それにも関わらず、粘土科学発展のためにご参加いただきました方々に心より感謝申し上げます。また、シンポジウム並びに休憩時間のない一般口頭発表のスケジュールをほぼ予定の時間通りに進めていただいた合計13名の座長の皆様にも感謝いたします。

最後に、討論会の準備や運営を陰で支えていただきました北海道大学環境地質学研究室秘書の佐藤亜実さんと千葉久美子さん、看板をデザインいただいた同資源再生工学研究室秘書の高橋文代さん、同環境地質学研究室の院生・学生の皆さんに深く感謝いたします。

(米田哲朗, 佐藤 努)



森本和也学生会員提供



宮脇律郎会員提供

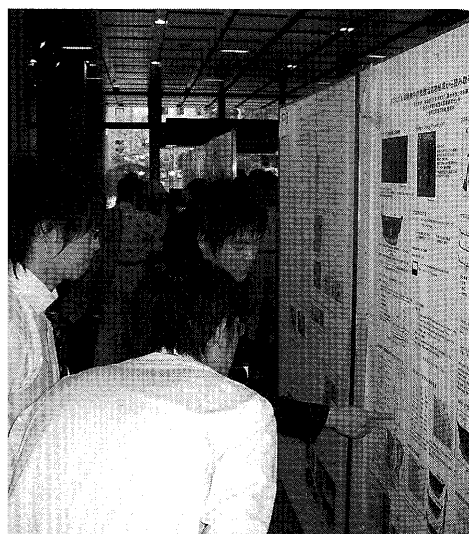
2007年第51回粘土科学討論会
シンポジウム基調講演
Keynote lecture on 2007 symposium

「材料研究の素材としての粘土の意義」
黒田一幸(早稲田大学理工学術院)

 日本粘土学会
The Clay Science Society of Japan
since 1956

2007年9月12日 北海道大学

シンポジウム講演者に贈呈されたプレート
(早大の黒田先生に贈呈されたものを例に)



森本和也学生会員提供



森本和也学生会員提供